令和８年度 第２回磐田市地域福祉推進会議及び
磐田市社会福祉協議会地域福祉推進会議　会議録

【日　時】令和８年８月 27 日（木）午前９時 30 分～午前 11 時 00 分
【会　場】磐田市総合健康福祉会館ｉプラザふれあい交流室１．２
【出席者】１３名
【欠席者】２名
【事務局】行政：５名 社協：６名

１　委嘱状交付

シニアクラブ磐田市山下六機氏の退任に伴い、後任のシニアクラブ磐田市田中恒男氏に磐田市地域福祉推進会議と磐田市社会福祉協議会地域福祉推進会議の２種類の委嘱状が交付された。

２　あいさつ

磐田市健康福祉部佐原部長および磐田市社会福祉協議会竹森会長から挨拶と地域福祉推進への感謝の言葉があった。

川端委員長より本日の会議の趣旨を伝え、議事に入る。

事務局

委員総数１５名のうち出席１３名で半数以上の参加により会議成立を伝える。

３　議事

（１） 地区別懇談会等の開催状況報告について

資料に基づき市社協担当者から地区別懇談会の開催状況について説明した。

委員長

事務局からの説明に対し質疑、意見をいただきたい。

委員

御厨地区の懇談会参加者予定欄に中高生という若い層が入っていることが嬉しい。開催時間も日曜日の昼間とのこと。役員だけが集まりやすい夜ではなく、いろんな方が参加できる日時となっている。地域福祉という言葉にある通り、今後も幅広くいろいろな層の意見を話し合っていける場にして、新しい意見も取り入れて欲しい。いろんな世代の人達が参加できる懇談会にして意見を反映させれば、今出ている課題も解決するのでは。地域の未来を担う層の価値観や生活の中の困りごとなどあるが、若い人の意見や要望があまり出てこない。市の職員や社協はただのオブザーバーで地域福祉懇談会へ参加するのではなく新しい意見を聞くことが出来ればいい。長年、高齢者のいろんな課題は継続しているが、新たな課題も多くの人達から聞く。なぜそういう意見が反映できないのか。単なる

懇談会ではなく地域福祉懇談会。地域に任せればいいのかもしれないが、もう少しこういうような意見を取り上げてみたらどうかというコメントを是非取り上げて欲しい。みんなで地域を良くするような活動に努めていけたらいい。

委員

南御厨地区の地域福祉懇談会報告書について３点補足したい。この話し合いの中で一番大切だと感じたことは「コラボ」である。既存の地域活動充実のところに「サロンの充実」とあるが、その話し合いの中で一緒に食事会を持ったらどうだとか、ボランティア同士のコミュニケーションづくりの場にしたらいいのではとか、お茶飲みやコーヒーといった他のものとコラボすることによって、サロンの充実やボランティアとの話し合い、つながりになるのではないかと感じた。2 点目。新たな交流・居場所づくりのところに、子どもたちとの触れ合いの場、多文化交流センター、中学生、高校生、大学生へのボランティアの呼びかけ先といった記載がある。若い人たちへの呼びかけやつながりが課題になっている。そういう意味で既存のサロンとつながるとか、充実ということが話し合われたので、そこは今日の計画にもつながると思った。3 点目、市全体に共通する課題の 3 番目。デマンド型のタクシーの利用について。南御厨はバスが無いため、交通手段が少ない不便なところである。今南御厨で進めているもろこ号は、自治デザイン課を担当として予算もついている。利用者は高齢者であり、免許を返納した本当に出歩けない人たちである。これは市全体のことにも関わると思うが、やはり縦割りではなく横断的なつながりは大事。先ほど福祉部長からも福祉と防災と横のつながりをきちっとしていく必要がある、ということだったがこの移動支援についても交通についても同様の課題であると思った。

委員

磐田特別支援学校について話し合う会の地域づくりの分野に出た。学校の先生たちや地域の方の意見をグループ内で聞いてきたが、その中に防犯防災ということが出てきた。具体的には地域とどんな連携をしたらいいかというところで、祭りに参加とか、作品を各交流センターに展示というものが多かったが、全体的には防犯防災のところをきちんとやりたいという話も出ていた。私は防災活動にも携わっているため危機管理課を通して各サロンから依頼があり出前講座に行っている。毎年出前講座へ行くサロンもあるが、あまりに防災に対して誰かがやってくれるという意識が強い世代だと感じる。地域の方々はそうではなく、自分ごととして考えてもらいたいと出前講座で伝えているが、地域の実情を知らないというか、うちのところは大丈夫、ハザードマップ白だよ、とかそういう話が出てくる。災害時に備蓄品は何を用意しておいたらいいだろうかという話も人に聞く。自分で考えて自分で学びながらという人は非常に少なく、人を当てにしていると感じる。先ほど地域福祉懇談会の中身の話をされていたが、私も民生委員の時に参加していた。テーマが割と決まったような感じということはいつも思っていて、そこに出した課題をどのように解決していこうかという計画や道筋がなかなか先に進まないという現実も見てきた。地域福祉懇談会の中で

課題があったら、その課題を少しでも計画的に解決していくために、どんな人たちに関わってもらっていったらいいか、という計画をきちんと立てていかないと、防災のことはとても入らない。意識している役員がいるところはこの時期にたくさん防災講座が入ってくる。6月位から出前講座へ行っているがサロンや自治会、防災部会もそうだが、福祉分野で防災という声が少ないのが現実。中学生や高校生と一緒にやっていくためには、やはり、防災が一番誰も否定しないテーマだと感じる。社会教育的な視点も地域福祉だが、防災をテーマにいろんな人たちに関わってもらう、自分ごととして考えてもらうというような地域福祉懇談会の組み立て方や今後の展開について意識していく時期になってきているのではないかと思う。

（２） 第５次磐田市地域福祉計画・第５次磐田市地域福祉活動計画中間案（基本理念・基本施策）について

資料に基づき市担当者から第５次磐田市地域福祉計画・第５次磐田市地域福祉活動計画中間案について説明した。質問、意見は次のとおり。

委員

地域福祉の主な課題 3 点はすごく良い。１番目の担い手不足の課題をどうやって解決していくかというところに 2 番目の地域コミュニティの希薄化の部分、そのつながりのところの仕組みや仕掛けをどう考えていくかということ、3 番目でさらに個々の対応みたいなところ、一番必要な方々へ手を差し伸べることができるような施策、というつながりで解釈したが、よいか。

事務局

まず担い手不足の部分について、当然、人は教わっていかないといけないし教育をしていかないといけない。その中でコミュニティが希薄化している状態をつなげていって、支え合い、ふれ合い、そういったところを進めていきたい。そこはつながっている。3 点目の課題の福祉課題の複雑化・複合化については、そういう課題を解決するのは行政だけではなく、地域住民や民生委員の相談や地域活動、そういったところで基本理念を進めていきたい。

委員

担い手不足ということで、特に若年層と働き盛りの世代の参加が少ないとあるが、学校単位で考えると小・中高等学校と併せて 12 年間地元にいる。だからその期間に学校単位で子どもたちの意見交換や市の共生社会についての考え方などについて意見交換する場を設けたらどうか。その間に子どもたちを育てていけば良いのでは。よく 10 名単位での意見交換とかは広報誌や新聞に掲載されているが、学校単位ではないように思う。個人的にはそういった子どもたちを巻き込む仕組みがあれば。5 年間あるので高校生だと 20 歳で社会人になる。そういったものに取り組んでいただけるといい。

委員

今の学校のボランティアについて。市民活動センターで中高生と関わるが、義務教育の中での学校教育を考えると、学校ごとにボランティア活動への理解にかなり差があることと、一番元の教育委員会の学校関係者の方々が地域のこういう課題に対してどのように考えているか。社会教育学的に言うと、地域学校連携協働の話になる。学校にもいかに地域へ目を向けてもらうかということ。市民活動センターや社協へ高校生がボランティアの単位を取りたいという目的でボランティア活動の紹介の問合せがある。ところが学校の先生たちがそこの理解が進んでいない。そこのところを第5次地域福祉計画・地域福祉活動計画ではやはり、縦割りとまではいかないが繋がるところにまず繋がっていくような方法を期待したい。特に18歳までは地元にいるので、今後子どもたちが就職先、進学先を決めたりするところにつながっていくと思う。子どもがそういう方向に向いたときに、家族が初めてボランティアの世界のことを知る、というのが現状だと感じている。

委員

担い手不足のところのお話を少しさせていただきたい。実際に担い手が不足しているというのは大きくあるが、これまで担い手となってきてくださった方それぞれの負担がすごく大きいまま、続いている現状があると思う。そこを担うのがやはり不安だと思われる方もおり、次の後継者が見つからないという話もたくさん聞いている。そうならないように、ほんの少しの手伝いからでいいんだよということを地域の皆さまに伝えていけるような計画になると、これだけでもやってみようかなと思う方が増えていくと思う。

委員

NPO法人の活動で就職が難しい若者と一緒に社会に触れるという活動へ参加している。担い手不足、若年層・働き盛り世代の参加が低下傾向にあるということだが、先日、支援学校の報告で特別支援学校にはセンター的機能があり、支援学校と一般の小中学校が交流する機会を設けているが少し壁がある。先生方も障がい分野への経験に差があり、その理解というのはなかなか追いついていかない。そこのフォローがない状態で交流すると、つまずいてしまう。特別支援学校の先生も交流するにあたり必要な準備というか注意点、交流の中で気づいた点や個々の問題点が出てきた時に相談し合ったりして整えた上での交流であること。地域の方たちとの交流について、地域の方たちは前向きに交流していこうと思っていても、実際の場面ではどういうふうに接していいか分からない。何かやって、かえって申し訳ないのではないかという意識がある中で、支援学校側がボランティア側のニーズとやって欲しいことのマッチングを行っているし担当者の先生もいるとのことだった。これは支援学校の話だけではなく、例えば特別養護老人ホームでも地域に様子がよく知られてないところと、応援団がたくさんおり交流が活発なところといった差がある。それを行政の力である程度押し上げることが必要。若い人の教育は教育委員会の力が大きいので、そこに関わっていただかないとなかなか難しいし、そこがもしかしたらポイントかなと思う。つながるまち、

と書いてあるがつながるではなく、つなげるにしないとできないのかなと思う。

委員

今いろいろ話を聞いて大変参考になった。先ほど特別支援学校が磐田市にできることは大変いいことだ。地域と学校がいかに元気に楽しく活動できるか。そこが非常に難しい。良いことだが、そこで働いている先生方には働き方改革というものもある。そこをきちんとしておかないと実際あっちこっち動かされて子どもたちがかわいそう。話をする人はいいがその実態をしっかりと押さえた中で、今後どうするかしっかりと議論することが必要。基本方針についても一般の人たちに伝わるか。できたらやりましょうだとか、スマホを見てくださいとか。80 歳過ぎの人はスマホを扱える人は少ない。一方で一番求めているのは高齢者。私は今シニアクラブ磐田市の役員だがその中で課題がいくつかある。その一つが会員の減少。原因としては魅力が無く楽しいことがないのではないか。もっと楽しいことをやっていけば活発になると思うので、私の場合は考えていろいろな趣味クラブをやっている。今からグランドゴルフなどをやっていく中で会員を増やしていこうと考えている。そういう楽しいことをいかに皆に伝えるか。運動、趣味、芸術個人ごと興味のある分野がある。そういうことを含めながらいかにやっていくか。担い手不足とあるが解決できない。役員は忙しく役になっても楽しくない。その忙しい姿をみんな見ているのでやりたくなくなる。でもそれをどうするかということが今一番の問題で、そこが解決すればなんとかなる。私のところは楽しくやっている。何かあったら食事会やみんなが楽しいと思うことをする。それともう一つは価値観の多様性。好きなことだけならいいが、その中でどうやるかを私たちも考えていかないといけない。もう一つは組織運営の硬直化。どこの組織もそう。硬直なので、今ここでそうでないようにしていったらどうかという話をしながら、私はとってもいい話をしているなと思っています。私は多くの市民の方々、多くの高齢者に伝わるようにするにはどうしたらいいか。先ほどのデマンドタクシーもそう。どこへ行ったらいいのか。そんな点を含めながら高齢者を代表してお話しをさせていただいた。

委員

私たちは身障福祉会でスポレク交流会を年 1 回開催している。その時にいつもボランティアをお願いしているが、3 年前まではスポーツ振興課のスポーツ推進委員にお願いしていた。中学生ボランティアもお願いしていたが、昨年から学校教育課からボランティアに協力する人が少なくなっていると話があり、いつもは 10 名以上のところ 4 名の中学生の参加となった。そこで、社協をとおしてボランティアを募り、合計 5 名の参加があり開催することができた。その時に中学生をどのような役割で参加してもらうかを考え、競技の進行役として活動していただき大人はフォローという形にしていただいた。今年は 8 名参加いただける予定なので、昨年度と同様に主体的な役割をお願いしようと思っている。自治会活動にも中学生が参加しているが、お手伝いではなく任せるような形で出来ればいいと思う。シニアクラブについて、私もグラウンドゴルフなどの誘いがあるが、身障福祉会の役があるのでま

だ気楽に出られない。役が大変という話が出たが、身障福祉会も同様。支部が減ってきている。役員も 75 歳以上。60 歳代がおらず引き継ぐ人がいないため困っている。ボランティアとして多くの方が関わってもらえると嬉しい。

４　その他

委員長

それでは、基本理念、基本施策についてのご意見を伺いたい。

委員

基本理念のところに「共に創ろう」という言葉がある。「共創」という言葉は、最近あちらこちらに出てくるが、共創という言葉ほど分からないものはないと市民やいろんな立場の役員から聞く。ここで福祉の世界なので敢えて分かりやすい言葉をつくってくれたのが、私はすごく嬉しい。他の施策にも反映できるように市民にわかりやすい施策になっていくと理解が進むのではないか。「共に創ろう　安心できるまち　磐田。」これが全体的に磐田市の施策の方向性だと思うので、「共創のまちづくり」というような難しい言葉よりも、この方がいいと思う。他の課でも施策について考えている所だと思うので福祉政策課からこんな風に出てくるとありがたい。「多様な魅力と幸福感があふれる都市　～共創で世界とつながるまち～」と全般的に言われているが、市民にとってみるとこの言葉そのものが難しい。私たちが市民レベルでいろんな立場でワークショップをやるときに磐田市の魅力は何かと問うとハード面がよく挙げられるが、今後の第 5 次地域福祉計画地域福祉活動計画ではソフト面の人と人とのつながりの部分を意識して欲しい。日常的に防災こそ必要だということも被災者支援コーディネーター対象のシンポジウムの中で盛んに言われていた。

日常的に顔の見える関係づくり、それからいろんな企業とのつながり、それと人と人とのつながり、これは小さい単位だと自分の地域あるいは学内になると思うが、できるだけつながる人たちがつながる形を意識した上での働きかけ方というか、仕掛け方というか、そこに工夫を重ねることがこれからの第 5 次の歩む道ではないか。その先に小さな仕組みでもいいので、その仕組みができる。こんなことならやれるかもしれないという仕組みができ、それが自分たちが提案した仕組みならば積極的に何かできるかもしれない、と関わってみようかという市民が出てくると思う。その双方の意見を伺いながら段々広げていくのが、一番今の時代に合ったやり方だと思う。私は市民活動センターの活動の中でファシリテーターの養成をここ何年間かやってきた。ファシリテーターが手伝えることがあれば声を掛けてもらいたい。一緒に勉強しながらファシリテーターの方たちもステップアップしていけたらいいなと考えている。ぜひ市民が主体的に動く、そしてグループで動く。そうでないと役員が来たから終わりになるグループがすごく多い。自主防災会でもそうだし、他の防災でもそうだが、役員の担うものがすごく多いので、そこの意識を協同のまちづくりの方でみんなが主体のまちづくりの方向に向かっていただきたい。

委員

基本施策１について２点申し上げたい。１つは嬉しかったこと。８月の福祉委員会で南御厨の福祉についてお話しさせていただいた。そこに委員がお子さんを連れてきてくれて、そのお子さんが南御厨の福祉を勉強して夏休みの課題として学校へ提出したいということでとても嬉しかった。そういう形でつながっていくことが大事だなと感じたことが１つ、それから今考えていることだが、今生活応援クラブを実施しているが、その生活応援クラブに中学生や高校生も地域支援員として参加して欲しいと思っている。前回も話したが中学校へ行って南御厨には生活応援クラブがあり、皆さんもお手伝いできるんだよということを伝えていくことが人材育成につながっていくのかなと思っている。

委員

基本施策２について、地域での見守り体制づくりに含まれると思うが、新聞販売組合で見守りネットワーク活動と中日新聞購読者のうち一人暮らし等で登録された方を対象とした『みまも～る』というサービスがある。新聞が溜まった時の緊急連絡先を販売店で管理している。登録されている方は一人暮らしで地域とのつながりが浅い方が多い。一人暮らしで不安を抱えている。それから、地域包括支援センターなどとも連携して何かあった時に連絡するような体制もある。シニアクラブも人が減っているというのはシニアの方は個性が強い方が多く、話が合わないとかトラブルになることに対して気を遣ってしまう方もいると思う。そういう方も地域でも見守っていける体制が必要なのかなと思う。

委員

今まで色々聞いていると、今の問題を網羅していると思う。ただこういうことはどこへ行っても挙げられるが、実際私たちに何ができるかというと、自分の身近なことで一歩ずつということだと思う。担い手不足というが、民生委員でも欠員がある。それは役の大変さだけが先行して伝わっている状況もあるのでは。実際にはそうではなく、自分の空いた時間で少しずつ見回りしたりすれば話ができることもある。私はこういう話を聞くと想像できるが、例えば福祉を学ぶということについて、各地区で福祉委員や福祉委員会がありそこで支え合いについて話を聞くが実際はどう支えっていけばいいのか分からない人が多い。私は地元の福祉委員会で生活応援倶楽部の取組や施策があるが、それをきちんと分かっていると、ちょっと困っていそうな人に手を差し伸べることができる。知っていれば、そこまでどうしようって困らず相談先を紹介できる。そういうふうに、今ある情報をなるべく広げていくということがすごく具体的で大切である。福祉委員は大体１年か２年で変わるので、そういう学ぶ機会を多くすれば、かなり浸透していくのでは。口だけで、支え合おう、安心できるまちとはどういうまちか問われた時に、具体的でないと、やはり伝わっていかない。民生委員もいろいろと大変なところもあるが、やはり人と人が顔を合わせて話をすることって、一番大切なこと。そのためには、自分は何ができるかを考えていかなければいけない、と皆さんの意見を聞いて思った。

委員
　分からない部分がある。この推進会議は国の施策によって磐田市が開催しているのか。

事務局
　国の施策ではなく磐田市として地域福祉を推進するために開催している。

委員
　国からの委託事業ではないということでよいか。

事務局
　よい。

委員
　ここは専門に関わっている方が多いので、自治会の立場でこの内容を伝えるときになかなかわかりにくい言葉が多い。例えば課題があって次に理念があり、それで基本施策がきている。我々がよく見るのは概念、基本理念が先に来て、それから課題という順。これについてはどちらでも良いが、この課題があるから理念としてはこんなものを持ってきたということがあればそれが大事。課題の中でも文脈が掴みにくいところがあるので、自治会でどう説明しようかと思う。課題にある、担い手不足は具体的にわかる。それから2番目の地域コミュニティの希薄化については、希薄化しているという方向に向かっているならば、どういうものが希薄なのか。3番目の福祉課題の複雑化、複合化とはそういう傾向を示しているとは思うが、数字的なものがあればそれを理念に繋げているのか。事務局として自治会連合会としてやってもらいたいことはどこか。繋がる部分は沢山ある。自治会は住民主体の組織だが、やることも多い。福祉について本当にやって欲しいことがあれば、それを太字にしてもらった方が伝えやすい。

事務局
　地域福祉は非常に幅が広い。福祉全般になる。先ほど他の委員の発言にもあったが、制度はあるのに情報が伝わっていない。我々もそういうところは認識している。3番目の課題に掲げてあるが、例えば制度を周知するときに、自治会の会合で広げていただきたいということは一つある。ただ、いろんな福祉施策がある中で自治会連合会に、特にこの部分を積極的にやって欲しいというところは、今のところ、私の中では思いつかないが、基本理念、基本施策を市としては地域福祉として考えて進めていただきたいというところということを、自治会連合会でもご理解いただき、そういうところに関わるというか、ご協力いただければというところはある。

事務局

担当者からもあったが、この一点を集中して自治会に、というようなお願いということではないが、おそらく自治会ごとの課題があろうかと思うので、それを地域づくり協議会や単位自治会で検討する中で自分の地域だったらこういうことが必要ではないかというところをやっていただければよく、全地域にこれをやっていただきたいということはない。ただ災害のことについては、避難行動要支援者という部分があろうかと思うが地域に住んでいて一人暮らしの方や、障がいをお持ちの方たちの防災の視点については市として全自治会へお願いしている部分もあるので、その辺はできれば取り残さない避難所に逃げられるような仕組み、助け合って声をかけていくというようなそんな仕組みを自治会にも作っていただきたいとお願いしている部分である。それ以外については自治デザイン課でも進めているように地域づくり協議会やそれぞれのところで課題を見つけていただき、少しずつ進めていただきたい。そういうところを自治会でもお願いしたい。それは自治会だけにお願いするというよりも、いろんな団体、例えばボランティア団体や専門職の方、地域に住んでいるいろんな方たち、シニアクラブの皆さんも含めて少しずつ進めていただければ、ということを全体的に網羅しているのが地域福祉計画となりますので、ご理解いただきたい。

委員

その辺はよく事務局で調整していただきたい。防災にしても高齢者や子どもの見守りなど関係しているところは多い。基本施策と基本理念とはつながると思うが同じ行政なので、よく危機管理課や自治デザイン課そういった関係課と福祉が定期的に話をしながら、こういうことを進めるために地域づくりに対して順位づけをしながらやっていただくとありがたい。

委員

個人の中で役割や時間という話があった。誰かがやってくれるという他力本願が多い。これまでの学びの中でボランティアは自発性により学ぶ。福祉に関わる子は医療とも関わりがある。経験しないと自分ごとにならない。意識の変化は大切。一番は防災が繋がれると思う。医療と福祉は共に進んでいかないといけないのでは。

委員（堀家）

自分はボランティア活動をしているが、ボランティア団体の中でも担い手不足と言われ続けている。解決方法として、ボランティア団体も、自分たちの活動の魅力をどう伝えていくか。若い人を含めた幅広い世代に受け入れられる、そういうところがあるということも考えている。いろんな団体が話し合うことで、横のつながりが持てるようになってきた。また、年2回ボランティア情報誌には、団体のいろんな情報、開催内容、参加して欲しい内容の掲載を心掛けている。連絡手段や申込方法にLINEや二次元コードを取り入れながらも紙媒体を希望する方もいるので、今は両方を丁寧に進めていくことが必要だと思っている。ボラン

ティアに関する情報はいろいろあるので、ぜひ自分のできること、ボランティアは自分の好きなこと、やれること、得意なこと、どこかに自分のやりたいことがあると思いますので、ぜひ参加していただきたい。

４．その他

次回日程：令和８年 11 月９日（月）午前９時 30 分～11 時 00 分

ｉプラザふれあい交流室 1.2

※懇談会のまとめと冊子案を委員へ送付する。

５．閉会